

第3章

全体討論

3.1 「中立」はありえないことに、人々が気づきはじめた

柴崎 それでは、お二人の講演を受けて、フリーなディスカッションを進めていきたいと思います。

柳本 科学ジャーナリストの行動基準の4で、「中立であってはならない」と言及されていますが、私の理解では、「中立であっていい」とか「悪い」とかの問題ではなく、中立自体がありえない、と思っているんです。だから、自分の立場が何であるかを明確にすることが、その人の見方を決定し、また他人がその人の見方を理解できると解釈できる。そういう表現のほうがいいと思います。

井上 なるほど、その通りだと思います。そういう時代が来た、ということですね。

柳本 いえ、時代とかではなくて、もともと中立はありえないのであり、そのことに人々が気づくようになった、ということでしょう。

林 科学事件の種類のうち、社会環境が破綻した事件としての薬害エイズを挙げられていますね。これは、本来人々の健康を守るべき厚生省の組織が破綻したと理解することもできますね。科学者に注目するのか、組織に注目するのかによって見え方も変わってくると思います。

井上 ご指摘は正しいと思います。生物製剤課長の不作為が問われた、いわゆる厚生省ルートの場合は、組織破綻のケースだと思います。安部英氏の場合は「量」の破綻のケースです。

柳本 エイズの場合、当時のハイリスクの人は、血友病患者と同性愛者と見られていました。社会的にはごく一部の人の問題で、社会一般には危害はないという認識があったと思います。だから、必ずしも、社会が破綻するという意識はなかった。

林 社会通念が破綻したのではなく、厚生省という社会組織が機能しなかったのだと思います。

井上 私の分類については、問題点はいろいろあると思いますが、さらに精緻な分類をめざしたいと思っています。元東大学長、吉川弘之さんが似たような分類をしていらっしゃると思います。私は、自分の経験から引き出しているのですが、吉川さんは、もっと高度な専門的な分析を通じて、同じような分類をされています。

3.2 科学ジャーナリズムは、防災と地震予知が別物と伝えたか

神沼 東海地震について林さんにお聞きしたいのですが、私がよく指摘しているのは、地震予知と防災とは別、ということなんです。法律の制定と地震予知ができることは別問題で、科学ジャーナリストがそれを峻別しないで報道したことの責任はかなり大きいと思うんですが、いかがですか。

阪神・淡路大震災のときも、さる大学の有名な先生が、世論の尻馬にのって、「地震学者は地震予知に相当の金を使い、関西には地震が起きないと言っていたのにけしからん」と批判していました。僕は、それに非常に腹がたったんだけど、それは全然事実と違う話なんです。そういう意味では、科学ジャーナリズムの責任はかなり大きいと思うけれども、どうですか。

林 おっしゃる面はあります。講演のなかで述べたとおり、神沼先生の2つ目のご指摘は同感ですね。震災当時大阪大学にいて、いま名古屋大学の池内了氏は、岩波ジュニア新書『科学の考え方、学び方』の中で、地震予知の研究をすることは、殺人に加担しているといわれても仕方がないといったことを述べています。

東海地震については、社会の側は、大規模地震対策特別措置法はできたけれど、まだ財源が不足しているということで、震災軽減のための財源措置を求めたわけですね。市民のなかには地震予知ができると強く思っている人もいますが、実際には、地震予知研究をするからには真剣にやってほしいと願っているにとどまる人が多数だと思います。静岡に関しては、まあいい線をいっているという気がします。

しかし、神戸・阪神間の被災地ではそうはならなかった。極言すれ

ば、神戸市の開発は、ニュータウンは売れないし、累積赤字は巨額だして、破綻寸前だったんですね。長田地区などの整備も遅れているなど矛盾だらけでした。口の悪い人にいわせたら、渡りに船で、地震により長田は一掃され、政府から復興のための巨額の特需を得、空港誘致まで実現した。地震がなければ倒れていたかもしれない市政が、激しい論争はありましたが、ともかく継続されたのは、地震のお陰だと。しかし、生活の中で科学を生かすというのはそんなことではないだろうし、そういう乱暴な状況でない道筋を示すのも、広い意味で科学ジャーナリズムの役割なのだと思います。

だとしたら、神沼先生の問題意識とは少し違うかもしれませんが、地震学者に責任を押しつけてばかりでは前進できません。柴田さんの著書を読むと、そのへんが非常に曖昧で、東海地震の予知防災体制に問題があると書いています。私は神戸のことでいえば、しばしばいわれるように東海地震の予知防災体制が問題なのではなくて、これはいまでもそうなのですが、他の地域で地震学の知見を生かせないことが問題だと思います。

神沼 柴田さんの本の問題ではないんです。僕が言いたいのは、科学ジャーナリズムの仕事として、はっきり世の中に伝えて欲しいことは、防災と地震予知は別だということなんです。世の中では、法律ができたことによって、なんとなく地震予知ができるという印象になっている。

井上 阪神大震災後は、マスコミも防災と予知は別とはっきり認識した。しかし、それ以前はそうでもなかった。震災後の諸法案では、防災に重点が置かれていますね。大震災以前の法律は地震予知ができるという大前提があったでしょう。

林 それはちょっと違うと思います。法律の条文を読むと、予知ができたときにどう対応するかということと、予知の可能性が高いということ

は書いてあります。

井上 必ず警戒宣言が出されることが前提ですね。

林 警戒宣言が出された場合の対応と、防災施策の推進が書かれていますが、絶対に予知ができるとは読めないのでは。そこまで法律を作る人や一般市民が理解していなかったわけではない。

3.3 科学ジャーナリズムの責任の取り方とは

高岩 ジャーナリズムとして何をもって責任をとるか、ということが明確ではように思われます。こういう議論でも、ジャーナリズムの責任とは、はたして何なのかがよくわからないんですよ。端的に言えば、みんなが知らないことを広く知らせるのは一番大切なことですが、それにより社会がどう動くかというところまで、ジャーナリズムとして責任をとる必要があるのか、どうか。ジャーナリズムの情報がどういうかたちで、社会の活動に還元されていくのか。そこまで責任をとる覚悟が求められるのでしょうか。それぞれの立場から見れば、あの報道はけしからんというものはたくさんあるわけですが……。

柴崎 たぶん科学ジャーナリズムの課題とは、簡単に言えばどういうものであるかと林さんが考えているかを答えていただければよいと思います。そもそも何を根本課題にしているか、という、とても難しい質問ですが。

林 確かにむずかしい問題ですが、あえて簡単にいってしまえば、最初にお見せした結論になりますが、「よりよい科学を育て、社会の中で科学と関わるさまざまな問題の解決のために力を発揮すること」だと

思っています。

高岩 どういうかたちで科学ジャーナリズムが機能したら、力を発揮したことになるのか。

林 結果的に、東海地震なら、地震の被害を軽減したら、科学ジャーナリズムのミッションとしては成功したと言えるでしょう。

井上 正直に言えば、予知に限らず、科学者依存体質の科学ジャーナリズムは責任はとっていないと思います。科学者も社会的責任をとっていないと思います。私など論説委員だから、特にそういうことを感じるのですが、科学ジャーナリズム自らが責任をとった例はほとんどないと思います。たとえば誤報の場合、新聞界には、その責任をまじめに受け付ける機関は存在しません。放送界には公共広告機構やBRCなど国民の信頼を得るための調査機関があり、ケースによって訂正を報道しなければならない義務があります。それでもだめなら、民事裁判で名誉毀損を争うしかない。その典型例が今春判決の出たニュースステーションの所沢ダイオキシン報道訴訟です。日本新聞協会では、ジャーナリストの責任問題を何度も内部議論していますが、そういう救済のための第三者自主規制機関がいまだできていません。

柴崎 法的責任ではなくて、自分が科学ジャーナリストとしてどういう責任の取り方をするか、ですが。

井上 報道後一定の時間がたってから、新事実の発掘を盛り込んだ検証報道があります。また新聞なら各社ごとに紙面審査をしています。誤った報道がされた場合には訂正記事を出しています。

保坂 理念的なことはともかく、科学ジャーナリズムが責任をとるべき、具

体的な事例を挙げてもらったほうがわかりやすい。

高岩 それは、井上さんが科学者の3原則を挙げられていましたが、その科学者をジャーナリストと置き換えれば通用するのではありませんか。

井上 それは、私の挙げたコードの9番にあたります。「事実に反したり、あるいは合理性を欠く報道や論説が原因で被害者が出た場合、報道や論説の信頼性を回復するために、その救済を自主的に行わなければならない」というものです。より具体的には私の講演の「科学ジャーナリストの社会的責任とは何か」を見てください。4つの原則があります。

林 私の体験した事例を一つ紹介させていただきます。『科学』の2001年2月号で、旧石器発掘捏造事件の検証を取り上げました。それ以前に、藤村さんが共著である記事を2回ほど書いてもらったことがあったので、毎日新聞のスクープを見て衝撃を受けました。そこで、なぜこのような事件が起こったのかを検証するために、著者陣と延々と議論を繰り返し、また現場を歩いて、2月号を発刊しました。石器の産状という決定的証拠について、貴重なサンプル写真を使って論じてもらうことができました。この特集が早い段階で出たことによって注文が殺到し、全国の埋蔵文化財関係者は、石器の発掘の基本の再認識ができ、検証作業のための情報共有に貢献することができたと思います。この問題に関しては、私は、そういう責任の取り方をしました。

3.4 科学ジャーナリストは社会の方向づけに責任をとるべきか

板橋 科学ジャーナリストが、公益性の高いテーマにコメントし、それによって方向性が変わった場合、ジャーナリストとして責任が負えるか、どうかということをお聞きしたい。これは非常に重要な点で、最後に林さんが、欠如のモデルと成熟のモデルを提示されましたが、僕もそこがポイントになっていると思います。巨大科学を科学ジャーナリズムが説明しはじめたときに、どれだけ政府と市民と科学者の間に立って、ちゃんとした方向性が出せるかどうかについて、非常に関心があるんです。特に、現在1兆円規模の核融合炉イーター計画が動いています。これに科学ジャーナリストはどうコメントするかが、さしそまった問題じゃないかという気がします。

井上 報道時については、新聞倫理綱領があり、事件には検証記事が不十分ですが一応あります。全国紙のように影響力のあるメディアが、たとえばイーターは不要という意見を表明すると、世論もそれに影響されます。またその報道に賛同する科学者がいると、しだいに全体の風潮も不要に傾いてきます。イーターに賛成、もしくは迷っている人の意見は表明しにくくなる雰囲気になるかもしれません。本当は賛否両論なのに、しだいに全国紙の論調に引きずられていく可能性があります。

それに対して責任をとるシステムは、現在のジャーナリズムにはないと思います。問題は、科学ジャーナリストは本当にイーターの中身が分かっているのかどうか、です。科学ジャーナリストも本当は原著論文を読むべきですが、仮に読んでいなくて、懇談会などの答申をそのまま紹介しても、根拠が明確な論調であるかぎり責任をとるシステム

はどこにもないし、取る必要もないと思います。

合庭 むしろ私は、責任をとらなければならないほど、現在のメディアには影響力がない、と思います。全国紙がどういう記事を書こうと、報道という事実はあるにしても、それによって多くの人が判断するかどうか、ですね。日本のジャーナリズムは一欧米と比べるとはよくないけれども—アフガン報道を見てもかなり手ぬるい。数日前までイギリスにいましたが、BBCなどの報道を見ても、日本とのスタンスの違いを感じます。ジャーナリズムの精神が違うのでしょうか。その中で、科学ジャーナリズムは何ができるかが問われているわけですが。

井上 たしかに、講演でも少し申し上げましたが、日本の場合、「報道、評論の自律の原則」（第3章）が徹底していないことは言えると思います。繰り返し申し上げているように、現場でオン・ザ・ジョブ・トレーニングをしているようではいけない。欧米の事情にはあまり詳しくありませんが、『Nature』誌の巻頭緒言を書ける科学ジャーナリストが日本にどのくらいいるか、大変心もとない思いです。

柳本 合庭さんの認識とはちょっと違うんです。私は、科学ジャーナリズムの質には危機があるにしても、プレゼンスそのものは非常に大きくなっていると思います。先ほどの大新聞の例は、ある報道ができるかどうかという判断の問題が重要で、大新聞会社が報道すると判断した場合には影響力は大きいと思います。

井上さんの講演の中で、「官僚や政治家と違って、科学者は真実に忠実でなければならない」という指摘がありました。私は逆だと思います。科学者はかなりいいかげんな人であってもよいが、官僚、政治家、論壇をリードする人たちは、それなりの倫理性が要求される。科学者や科学ジャーナリストはその議論の中に入っていくことが重要であり、一番求められるのは、官僚、政治家たちが高い倫理性を持つ社

会だという気がします。

井上 日本新聞協会は、新しい時代に対応するため、2000年6月に新しい新聞倫理綱領をつくりました。私も、論拠の明確な評論など、科学ジャーナリストの社会的責任である「責任ある評論の原則」を痛感していますし、責任も感じています。

柳本 別の言い方をすると、シビリアン・コントロールは軍人に対してだけではなく、科学者に対しても当然必要だと思います。だから、世の中をリードする人たちが科学や軍隊をコントロールすべきであり、科学者自身にそれを求めても仕方ないのでは。

井上 1996年に起きた、いわゆるソーカル事件は、私たちに「科学と社会」のあり方では科学者と科学論者との共同研究が必要だと教えたと思います。現代のように、科学者自身の社会に与える影響が非常に大きい時代には、「科」の中に自らを閉じこめて良しとすることには賛同しかねます。

林 その責任は、科学者、政治家、両方にあるんじゃないでしょうか。生命・倫理が重要な問題になってくると、科学者にも倫理委員会での検討や議論をした上での研究が求められるようになっていきますし、われわれのような民間の小さな研究所にも、科学と倫理に関わる調査研究の委託などもよくあります。先ほど私が提示したモデルでは、左右の図が独立していましたが、最近ではそれらが緊張感を持ちながらオーバーラップしてきていると思います。

合庭 だからこそ、先ほどから問題になっているように、そのときの科学ジャーナリズムの役割はどうあるべきか、なんです。

板橋 それは、大新聞が論陣をはるより、『ニュートン』などの小規模の雑誌のソースに、いろいろな立場の意見をのせていくようにするほうが科学者の立場から見ても正しいのではないかと思います。北國新聞もそうだと思いますが、そういうところが積極的にイーターに対する突っ込んだ意見を紹介していくようなことが、いろいろな問題で行われるのが健全だと思います。収斂させるかどうかは、政治家の問題に関わってくるので、われわれ科学者の責任ではないと思います。

合庭 科学者にも責任はあると思いますよ。役所の審議会などでも、専門家の科学者が出席して、役人の書いた答申を発表するわけですから。また、その答申に近い発言をする科学者が選ばれますから。

井上 私も、その問題については、審議会の委員として参加した科学者も、最終的な責任をとるべきだと思います。

合庭 答申を出すわけですから、責任はあるでしょう。最近では、審議会の答申は、メンバー名も含めてインターネットでも公開されるわけですから。

井上 審議会の委員になったら、その結果責任は当然とるべきでしょうね。ただ、無過失責任を超える部分については、科学者が所属する大学の自治の中でとるべきであり、通常の意味の結果責任まで自動的に負わせるのは問題です。

合庭 口当たりの良い科学者が審議会の委員になって答申が出て、本来はメディアがそれを批判すべきなのに、審議会の答申をそのまま報道する傾向がありますね。

井上 私の講演はその問題を言いたかったのですが、そうであってはならな

い、ということなんです。講演の中の「報道、評論の自律の原理」(第3章)を日本のマスコミでも確立したい。

林 その典型例がカイワレ大根事件ですね。

合庭 記者クラブで配布された記事をそのままのせる新聞は信用できない、という気がします。そういう情報なら、インターネットでも簡単に知ることができるわけですから、われわれはさらにそれ以上に何を知るべきか、それを示唆するのが、本来のメディアの役割ではないでしょうか。

井上 マスコミは国民の「知る権利」擁護の原則をもっと自覚したいと思います。

3.5 ジャーナリストとしてのセンス、感性を磨く教育を

柴崎 先ほど、井上さんは、日本人の科学ジャーナリストの質について—科学という場合、自然科学のイメージが強いと思いますが—個々の自然科学の知見を欠いているから、事柄を本当によく理解しないで報道している面がある、という趣旨のことをおっしゃったと思います。たとえば総研大では、個々の科学の分野で、スペシャリストの卵を育てるわけですが、彼らがジャーナリストになれば良い成果が生まれるというのは正論だと思います。

でも、それ以上に、原著論文は読めなくても、もっとジャーナリストとしてのセンスを磨く必要があると思います。そういうセンスを欠いている人が多いんじゃないでしょうか。たとえば、CNNなんかはレ

ポーターというよりジャーナリストであり、キャスターではなくアンカーで、自分のプロフェッションの中で、生命をかけて発言している印象を受けます。そのあたりのことが、日本では科学の分野だけではなく、ジャーナリズム全般に欠けているような気がするんですが、いかがでしょうか。

井上 もちろん、ジャーナリスティックである必要はあると思います。どこに問題の本質があるのかを見極めなければなりませんから。しかしセンセーショナルであってはならない、というのが私の持論です。なぜかといいますと。多様な意見を封殺するからです。

柳本 政治に対して社説があるように、科学に対しても社説のようなものがあってもいいのではないのでしょうか。それがジャーナリスティックというのであれば、政治でも同様の要素があるわけですから。そのことが、科学の充実に貢献したり、科学者の幻想を是正することにつながるのではないかと思います。

井上 私は社説でよく科学と社会について展開しています。社説については責任はとられています。実は、その場合でも1人で書くのではなく、私にはアドバイザーがいます。そういうアドバイザーとのディスカッションなくして、具体的な「科学と社会の方向」を決めるのは、非常に難しいですね。

柳本 しかしそういう意味では、新聞のほかの社説でも同様に、論説委員にはアドバイザーが要るでしょう。

永山 今のお話を伺っていてよくわからないんですが、ジャーナリズムの問題なんですか、それとも科学ジャーナリズムの問題なんですか。そもそも科学ジャーナリズムの特性というものはあるんですか。

- 林 科学ジャーナリズムは、いちばん啓蒙的だと思います。ある全国紙の記者に聞いたのですが、一番啓蒙的なのは、科学記事を書く人と、家庭欄を担当する女性記者だそうです。
- 永山 私は、そういう啓蒙性が育ってほしいのです。なぜなら、科学者に変な意味でのジャーナリスティックな要求をされると困るから。上質で信頼性の高い科学ジャーナリズムが育ってくれば、われわれとも共闘できますし、そうありがたいですよ。私は実は、この会議はそうしたいと思っているので、本当はもっとジャーナリストに入ってほしいんですよ。
- 井上 地元では原発問題などいろいろな問題を抱えていますので、自分でもいろいろ調べたり悩んだりしながら記事を書いています。一応学位はとっていますから、概略は分かるけれども、本当に専門なところまでは分かりません。ですから、こういう「科学と社会」研究会も、大学の研究者だけではなく、ジャーナリストも何人かいないと、かみあった議論はできないと思います。
- 板橋 ただ一般的に言って、申し訳ないけれども、雑誌や新聞に書かれる科学記事のほとんどは、われわれサイドから見るとまちがっている場合が大半です。事実が理解されていないで書かれている場合が多いと思います。今、パワーのあるジャーナリストを作ろうという話が出ていましたが、政治では番記者がいますが、科学の分野では、科学記事を理解して政治家に話をするというルートはないでしょう。たとえば、クリントン前米大統領は日本でニュートリノの大発見があったことを新聞で話しています。中身についての詳細はクリントン氏も知らないと思いますが、政治家を啓蒙する役割は果たしているわけですね。ジャーナリストにパワーをつけるためには、そういうことも必要なんではないでしょうか。

保坂 ニュートリノの質量については、ワシントンポスト、ニューヨークタイムズ、それに日本の大手新聞もみんな書きました。政治家が読んで、必要ならそのことをしゃべればいいわけです。アメリカは、科学を理解していることを非常に高く評価するんですよ。日本ではオタク的にとられがちなんです。

3.6 成熟社会における科学ジャーナリズムのあり方とは

板橋 私は、林さんが指摘した、成熟した社会のイメージを知りたい。どういうイメージで、あの三角形を書かれたのか、それが知りたいですね。成熟した社会は、国民1人1人が、ニュートリノも含めて科学を理解していることを想定されているのだろうか。そのレベルに至るまで、どういう道のりがあるかを示すのも、科学ジャーナリズムの責任だと思うんです。それは、大新聞だけではなく、すべての科学ジャーナリズムがめざすことだという気もしますが。

林 それは私も大事なことだと思います。あえて付け加えると、日本では、科学者の中で科学を広く知ろうという試みは、ある時点から成功してこなかったと思います。先ほどニュートリノの話が出ましたが、あのときに一番感じたのは、もっとも科学離れしているのは、科学者ではないか、ということでした。実際、物理学者の中で、何割があのでニュースに興奮したか。ある物理学者は、むしろイギリスに出かけたときに、現地で日本よりも高く評価されたことで驚いたそうです。せっかくの成果が、科学者のなかでさえ共有されていないということなのでしょう。科学雑誌編集者として忸怩たる思いでした。ニュートリノの『科学』の特集号も売れ行きは芳しくありませんでした。

井上 科学を知ることが教養人のベースにする風土は、日本にはない。それはなぜかと言えば、科学は経済の道具という意識で、欧米に追いつき、追い越すための教育をしてきたからでしょうね。科学を教養の条件とするか、経済発展のツールとするか……この国民性の違いは大きいですね。科学に対するそうした見方が、科学ジャーナリズムのレベルを低いままにとどめている遠因ではないだろうかという気がします。日本ではまず科学へのムードを変えることが非常に大事だと思います。

高岩 科学ジャーナリズムの教育を充実させる必要があるということです。そういう人材を日本の社会が受け皿として、活躍する場所を提供できるかどうか、という問題もありますね。

井上 少しずつ盛んになっていますが、公教育に（科学）ジャーナリズム論を取り入れていけば可能だと思います。科学を道具としてではなく、文化としてとらえる風土に変えることはできると思います。啓蒙が悪いはずはないので、テレビ番組でもそういう番組を作っていくことも重要でしょう。そういう意味では、必ずしも日本のマスコミはレベルが低いわけではないと思いますが、日本の科学ジャーナリズムがそのレベルにとどまっているのが問題だと思っています。

ですから、大学もその存在をかけて戦う余地はたくさんあるのではないかと思います。質の高い科学ジャーナリストの養成という問題を、このような研究会で議論していくことも、大切なことだと思います。アメリカのコロンビア大学では、前副大統領のゴア氏などが客員教授として若いジャーナリストに向って講義しているわけですからね。科学者だけのコミュニティでは限界もあるので、そういう風土に学ぶ必要もあるでしょう。

柳本 科学と技術の中では、ヨーロッパでは科学のほうがステイタスが高いが、日本では相対的に低いのはたしかだと思います。一方では、両者

が近いかたちで理解されているという長所もあると思うんです。現実には、工学部を作った総合大学は、東京大学が世界初だそうです。そのことに典型的にあらわれているように、科学に実用性を求めてきたわけですね。その長所と短所をあわせもっていると思います。

合庭 大学の工学部は、19世紀に産業革命を達成したドイツの工科大学をモデルにして導入したからでしょう。

柴崎 それでは最後に、今回のテーマについて、林さんから何かおっしゃっていただけますか。

林 最後に一言言いたいのですが、『Scientific American』という雑誌は、文字通り訳せば、「科学的なアメリカ人」ですから、そういうものをめざして積み上げてきて、現在があるわけですね。ここで皆さんがおっしゃったことは、たぶんすべて正しいと思います。後は、どうして実現するか、でしょう。科学者を批判するつもりで申し上げたわけではないし、科学ジャーナリズムもさらに良いメディアになりうる可能性があるわけです。

日本の風土というご指摘がありましたが、努力しだいによっては、必ず変わっていくと思います。新聞記事にしても、10年前よりは確実に前に進んでいると思っています。まず、自分の問題として何ができるかを考えることが重要で、自分とは無縁の問題として無関心にならないことが、成熟した市民社会の条件だと考えています。科学ジャーナリズムを越えて広く見ていけば、そういう成熟度の高い動きは、着実に広がっていると思うし、それをうまく取り上げているところは、時間がないのでいずれご紹介させていただきたいと思いますが、地域コミュニティや自治体や企業でも成功しています。

柴崎 科学ジャーナリズムはこの研究グループの中心テーマになりますの

で、今後とも同じテーマでワークショップを開催する予定にしております。また、皆さん、ぜひ参加していただき、言い足りなかったこと、疑問点などを述べていただきたいと思います。本日は、どうもありがとうございました。